ICT 海外ボランティア会会報
No. 96

2021 年 2 月 1 日（月）

URL: https://ictov.jimdo.com
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿
フィリピンの医療と手術のこと
株式会社ハイホーCEO
当会顧問　鈴木　武人氏

◆特別寄稿
徒然日記(12)
当会特別顧問　石井　孝氏

◆JICA の動き
JICA 海外協力隊 2021 年春募集実施時期　事務局

◆海外グラフィティ
ブランド人になれ！を読んで
三島由紀夫回想
最果タヒの世界
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智氏

◆海外便り
南イタリア俳柳紀行(2)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之氏

◆第 5 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様　事務局

◆第 6 回 ICT 海外情報ウェブサロン開催のご案内　事務局

特別寄稿

フィリピンの医療と手術のこと

元 PLDT ﾁｰﾌｵﾍﾟﾚｰﾃｨﾝｸﾞｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞ
元 NTT アメリカ社長
現　株式会社ハイホーCEO
当会顧問　鈴木　武人

我々のフィリピンでの最大の楽しみはスキューバ・ダイビングでした。我々も揃って Smart の近くで日本人の経営するダイビングスクールへ入学し、先ずは事故への対応、サバイバル法等のレクチャ後に簡単な学科試験を受け、その後に其処に設けられた 10m 四方しかありませんでしたが深さは十分なプールで実習を受けました。学科は簡単なものでしたが、ダイビングのコツは足フィンを生かす為に自転車に乗るようにゆっくり腰の辺りから足を動かす事でした。これらをへて何とか参加メンバー全員が無事免許を受けました。その後そこで紹介されたバタンガスのビーチハウスで器具を借りて初めてのダイビングを始めました。最初はルソン島の南の海岸で珊瑚礁の色とりどりの熱帯魚と一緒に泳ぐ事で十分満足でしたが、徐々に大きな魚が回遊する海峡へも遠征したくなります。実は免許と言っても今回取得したものは初心者のもので、その上に暗い海でダイビング出来るものや、洞窟へ入れるもの、さらには難破船の中にはいれるもの等のグレードがあり、その上でインストイラクタの免許もあるそうです。

これは事業に関わる面白い話でしたが、日本から多くの若者がこれ等の免許を目指してフィリピンの海岸、特にマニラから近い元米海軍基地のあったスービック保税区に来ているそうです。其処にはリーゾナブルなリゾート施設があり、そこで暮らしながら免許取得に励むのですが、その傍ら日本へのコールセンターで働くのだそうです。従って、若者の費用負担は殆ど無く、また施設は利益があげられると言う訳です。最近は、英語取得の為のフィリピンへの留学を受入れるものや、コールセンターを利用して遠隔で 1 対 1 の英語会話教室等色々なサービスが出てきています。

何回目かのダイビング中に恐ろしい経験をしました。それは到着が夕方近くになってしまったのですが、島と島の間の海峡でアメリカ人の仲間とスペイン人のインストラクタに従って行ったダイビングでした。地形の説明を受けた後、潜水を開始してホバリングで相互の状態確認をして居た際、沖側に居た小生がいきなり海流に背を捉まれて流され始め、更に急速に沈下が始まったのです。上を見ると既にメンバーの人影が遥かに小さくなり、周囲は真っ暗、深い井戸の底から空を見上げている感じになりました。小さい穴の様になってしまった空に恐怖を感じ、近くの岩壁に掴まろうとしますが、沈下速度の為に何度も撥ねられて掴む事が出来ません。空気ポンプを押しても変化が無かったので、最終手段の錘をはずした頃から徐々に海流に逆らって上昇を開始、その直後に海流から外れたのか、急速上昇となりました。そのタイミングでインストラクタがようやく追いついて、小生の頭から身体を抑え、二人でホバリングを始めました。潜水病を防ぐ為の処置として承知していたので、そのまましばらくその状態を続けて、その後ゆっくりと上昇しました。インストラクタによれば 50m 以上もぐってしまったとの事でした。さすがにその日は終了として、メンバーで夕食、飲み会でした。インストラクタからは暫くの間は飛行機に乗ってはいけないと念を押されたのは言うまでも有りません。

その件から 1 月後、Smart 役員会メンバーに義務とされた St. Lukes(日本の聖路加と同じ米国の系列病院)での健康診断を受けた際、自覚が無いのに問題が発見されました。

即ち、一日目に実施した検査では問題無しでしたが、それを前提に翌日実施した急傾斜を全速で走るトレッドミル、即ち身体に負荷をかけた状態の心電図で異常が出たのです。直ぐに心エコー検査を行い、心臓内での逆流が見出されました。病院にそのまま残され、専門医が呼ばれて今度は直径 30mm 程の棒状の器具を食道に入れる、とても苦しい経食道心エコーを実施し、僧房弁腱索断裂と確定しました。食道エコーは心臓の直近の食道からエコー測定をするので大型液晶画面に自分の心臓の中が綺麗に映されます。心臓自体は規則正しく動いていたのですが、スイッチの様な弁が塞がらずに、その先に細い糸の様な腱策がふわふわ踊っているのが見えました。医師の説明では、我々世代の少年期に世界的にある種の風邪が大流行したようで、これが原因でリュマチ熱(リュウマチとは違います)を起こし、多くの方が関節炎、腎炎等にもなったそうです。思えば小生も中学１年の頃までに一連の病気を経験しています。この菌の残渣が僧房弁や三尖弁等の組織の先端に石灰化して残り、それが反対側の弁の腱策を削りやすくなった状態で、急速潜水が契機になって断裂させ、僧帽弁の閉鎖不全を起こしたと思われると言うことでした。大雑把に、この関係の病名は『急性心不全』とされ、死に至る事例が我々世代に統計的に高くなっているという事です。

その心臓センター長の医師 Dr.Carieha から、私の場合、『何時死んでもおかしく無い、またその死に方は、

①ポンプ力の強い心室から逆流した血液が圧力で肺を破り、結果として 5 分程で窒息死する。これは肺に血液が充満した状態の窒息死で大変苦しい。

②逆流によって心臓内で生じる血栓が脳血栓を起こし、即死はしないものの周囲に非常な負担をかけながら結果的に死亡する。

③逆流によって身体の酸素が不足し、心臓がこれを満たす為に過度に働くことによって心筋が破断、いわゆる心臓爆発で、これは数秒の即死でラッキーなケース。

の三つがあるが、貴方にはその選択はできない。選ぶ事は緊急的な手術しかない』、と説明されました。Smart からは人工心肺手術のために何十人もの社員が献血を申し出てくれたそうです。状況を NTTCom の鈴木社長に報告し、NTT 関東病院の医師に相談した所、『技術や設備は全て米国からのもので問題は無いが、日本では AIDS 騒ぎで自己血手術法が確立して 2 年が経過し、安定したといえる。予後を考えれば輸血せずに手術できればこれに越した事はなく、これを利用する方が望ましい』との事で、収容できる東京女子医大を紹介戴きました。自己血手術とは、手術前の 1 週間程度、増血剤を処方しながら 1 日 300cc 程度採血して手術の際に必要な輸血に備えるものです。

小生は幸いにも心不全の状態が検診で発見されたことで手術に至り、上記三つの死に方による死を未然に防ぐことが出来た事になります。日本でも負荷をかけた検診は医師に要求すれば可能だそうですので、一度是非お試しください。

当時の術式は弁全体をチタンやカーボン製の人工弁(耐用 80 年だそうです)に入れ替える弁置換と、破断した腱索に繋がった弁尖の一部を取去って縫い合せる形成術の二つがありました。もっとも最近は破断した腱索自体を特殊な糸で修復する方法もあるそうです。人工弁には術後の血栓予防の為の抗凝固剤処方が不要な豚の弁を加工した生体弁もありますが、10 年程の寿命に過ぎず、また縫い合わせでは弁開口部が小さくなって血流が全体に少なくなって、勿論運動も出来なくなるそうです。結果的に小生が受けた正中開胸手術は胸を開き、ネクタイに似た位置と形状の胸骨を外して心臓を露出させて天然の弁を撤去し、チタン製の弁に交換するもので、体温を下げて口から直接心臓へ繋ぐ人工心肺によりました。完全な麻酔で行われますので、本人の術中の苦しみは感じません。ただ、手術の直後は自分の血液を水で薄めて人工心肺装置を満たしているので、その水を抜く必要が有ります。勿論口から心臓に直接繋いだ器具は術後も入っており、勿論話すことは出来ず、何も口には入れられず、喉が死にそうなほど猛烈に渇いて苦しみます。手術前の説明で喉が渇くことを聞いていればあれほどに苦しまなかったと思います。面

白い経験に、手術室からICUに送られた時の家族との面接がありました。医師が家族に手術が無事終わったと見せるだけなのですが、喉が異様に乾いていると訴えようと娘の手にカタカナでミズと書いて知らせようと何度か試みたのですが、これが通じません。このいらいらが酸素を消費するのか、警告が点滅しだして医師が『麻酔が効いているので、この状況は患者の妄想であったり、また覚めた時に記憶している事はまず無い』と切り上げられました。退院後、はっきりその場のやり取りを覚えていたのは、医師の理解とはかなり違っていました。

手術の翌日には婦長がベッドの周りの捉まえ立ちを指導し、翌々日には廊下の散歩となりました。その散歩中に血栓が飛んだのか、意識していれば問題無く物を持っていられたのに、無意識になると物を落としてしまう不思議な感覚を味わいました。廊下で様子を見て居た看護婦長の迅速な対応で、直ちにCTで確認し、血栓を除くためにヘパリンの点滴投与が開始され、その後は特に問題も出ませんでした。速い処置が有効だったのでしょう。この時期にNTTComの担当者が幾つかの相談、また契約資料の確認等に見えました。意欲は有ったのですが、集中してしばらくすると酸素量が足りなくなったり、脈拍が乱れたりし、看護婦長がとんで来ました。担当者には気の毒でしたが、追い返されてしまい、申し訳ない事をしました。

落着いた頃、廊下の散歩を開始、その際、別の病棟へ案内されました。其処は大部屋で、何と十数人の患者が革バンドで寝台に括り付けられていました。手術が怖くて病院を抜け出し、家へ帰っては家族から病院へ戻されるのを繰り返し、手術への恐怖、また誰も信じられなくなった状況で精神に異常を来たした患者を収容している所だそうでした。手術の前の晩に外出許可をとっては居ましたが、言わば思い残す事が無いようにと床屋と風呂屋へ行き、ついでに近くの割烹（熱海と記憶しています）で河豚料理を堪能して居た小生を、あちこち連絡して探した婦長から、その晩大目玉を食らった理由がこれでした。

血栓が飛んだ事から入院期間が当初の予定よりも長くなり、その後のプロジェクトへの復帰に不安であるとのレポートが行ったのでしょうか、鈴木社長と退院の数日後に面談、初めて酒を飲み、『なんだ、大丈夫ではないか』との言葉を戴いて復帰が決まりました。1ヶ月以上の禁酒状態からの復帰で、酒の味が身に沁みて美味かった事と、利きが良かったのが忘れられない思い出です。

所で、手術に日本へ戻る際、知己を得ていた現地航空会社の責任者に単に『宜しくたのむ』のつもりで、話しをしたら、『その状態では飛行機には乗せられない。現地での手術が望ましい』と返事されてしまいした。そこで既に日本での自己血手術を受ける事で了解をとっていた現地の医師に相談した所、飛行機でのリスクを最小限にする事が出来ると、血圧と心拍数を抑える処方をしてくれて、頭痛とふら付きが有りましたが、航空会社には黙って機乗し、帰国して手術を受ける事が出来ました。

フィリピンに戻って仕事に復帰し、現地の仲間と雑談も出来るようになった時に、何が有ったかを、献血の申し出への感謝と共に詳しく話しました。その時の皆の反応で、『人工弁の話はしないほうが良い、もしかしたらその弁を狙って襲って来る輩が居るかもしれない』といわれ、やっとフィリピンに戻ったと言う実感がしました。

特別寄稿

徒然日記(12)

当会特別顧問　石井　孝

「肺結核」

こんな事を言うと不謹慎の極みだと言われそうだが、敢えて投稿してみることにした。

昨年は、年がら年中、コロナ、コロナであったが、幸いにして小生の知り合い、親戚等には、今のところ罹患者は出て居ない。

所が、嘗て一世を風靡した伝染病の「肺結核」の際は、親戚や近所の人達が大勢罹患した。自分自身も危ない所であった。

こちらの病もコロナに劣らず致命的な豪病で、古くは労咳などと言われ、長い間、人間を悩まし、苦しめたが、当時、マスコミ等と言ったものが無かった所為か、大騒ぎにはならずに諦めの状況にあった。

この豪病もペニシリンの発明により征服され「不治の病」から「治療可能な感染症」となり、先進国での感染者は急激に減少し、平均寿命の延びた日本では、いつしか過去の病となった。

そこで、今回のコロナ対策である。手洗い、マスク、三密を避ける等の対応は必須かも知れないが、あまり空騒ぎのような事はせずに現代医学の成果を待つしかないのではないか。

「シバレン」

久し振りに「シバレン」の短編集「剣鬼」を読んだ。

柴田錬三郎の小説『イエスの裔』は芥川賞と直木賞の両方の候補となったが天秤にかけて直木賞を受賞したそうである。

氏の作品は純文学と大衆文芸の双方に、根を張った「面白い」を通り越した深い味わいを感じる。

藤沢周平氏の作品なども同様の系統に挙げられるのかも知れない。

うまく表現出来ないが、柴田錬三郎氏の作品にはニヒリスティッなロマン主義とでも言おうか、名門珈琲のほろ苦い香りが漂う。

「夜のピクニック」

第二回の本屋大賞を獲得した恩田陸の傑作である。巧妙なステージ設定と巧みな登場人物のセレクションを行ったの上でのストーリー展開は誠に見事で、とても面白い。

恩田陸の卓越したセンスと頭脳をうかがわせる。これを文学というか如何かは知らないが、女性にしか書けない novel（新奇な）な story である事は間違いない。

コロナの鬱屈を忘れさせるには持って来い、の読み物かも知れない。

「ガダラの豚」

52 歳でこの世を去った中島らもの小説である。この作品のテーマは呪術・超能力・奇跡であるが、ただならぬ奇才を有する中島らもの筆にかかると興味津々たる物語になる。

小説の中に、そこはかとなくながれる剣豪小説などとは違った、バイオレンスへの思郷にも心惹かれる。これは男が書く小説で、先に読んだ「夜のピクニック」とは対極的である。
また、小説に関わった参考文献が極めて多義にわたっている。中島らもは大変な勉強家でもあったようだ。
もし、彼が生きていて、現在のコロナ騒動を小説化したらどんなモノになるのだろうか。

「アンデルセン」

手当たり次第の乱読、今度は「アンデルセン傑作集マッチ売りの少女/人魚姫」（天沼春樹訳新潮社）である。
表題を含め 15 編の作品が収録されている。昔、絵本などで読んだことはあったが、じっくりと読んだのは初めてであった。
これは子供ではなく人生の苦節を経験した大人向けの「童話」ではないか。凄惨で怖さを感じる。

「短編小説」

どちらかというと、長編小説より短編小説の方が好みである。珠玉の逸品などと言われるモノが短編の中にある。
作家の思想や想いが、彼の技巧とたくみにからみ合って短い作品の中に凝縮し、得も言われぬ味わいを醸し出す。
藤沢周平の短編集に「海坂藩大全（上、下）」がある。表題を自分の毛筆でしたためただけあって自信作を集めたものであろう。実に面白い。

「下戸」

宮本輝と宇江佐真理を交互に読んでみた。後味は、宮本はほろ苦さ。宇江佐は甘酸っぱい。好みの残り味としては、宇江佐真理だ。
それにしても、お酒の飲める方は羨ましい。私は全くの下戸で、ビール一口で頭が痛くなる。
友人と語り合う、憂さを晴らす。お酒飲みが羨ましい。

「浮雲の剣」

表題「浮雲の剣」に惹かれて、古川薫氏の小説を初めて読んだ。直木賞作家とは知らなかった。「男心」とは何かと言ったところを色々と探っているような感じがして、中々面白かった。文章も上等な三杯酢を使った心太のような口当たりで、とても爽やかな感じであった。氏の作品を探してもっと読んでみよう。

「宇江佐真理」

むしゃくしゃしたり、気が滅入ったりした時、飲んだくれたり、胃でも悪くする薬など飲む事はない。
市井の人々の人情を描いた「宇江佐真理」の小説を読むといい。気分転換が出来る。

読み出すと、何となくふかふかしたソファーに寝転んでいるようなリラックスした気分になり、おまけに、読むにつれてほろりとさせられる。
　些かオーバーな言い方をすれば、心が洗わると云うヤツかもしれない。「宇江佐真理」はお薦めである。

「植松三十里」

　吉山様、「桑港にて」と「燃えたぎる石」を読みました。仰る通り、良いですね。上等なレモンスカッシュです。
　「燃えたぎる石」の中で、つぎの一節がありました。色々と現役当時を思い起こしてしまいました。
　「異国人というのは、こちらが隙を見せず、誇りと誠意をもって接すれば、向こうも誠意を示す。むやみに恐れる必要はない。怖いのは、むしろ同胞だ」
　何も異国人に限った話ではありませんね。

「眠狂四郎無頼控百話」

　表記の長い、長い、小説を、コロナ払い、猛暑払いに読んでみた。あっちへ行ったり、こっちに行ったり道草を食いながら殺人剣を振るう。
　昨今人気の剣豪小説とは一味も二味も違う。面白いと言えば面白いが、ハッピーエンドが無い心の遍歴は何とも重苦しい。
　これが剣豪文学というものなのか。コロナ払い、猛暑払いにはエンタメ専一の剣豪小説の方が向いているかもしれない。

「男気」

　童門冬二の長編に「平将門」という小説がある。彼の描く将門は無類のお人好しで男気があり、そして、強い。女性にもてる。私のような　出来の悪い男から観ると羨ましい限りである。
　しかし、良い事ばかりでは無い、寧ろ最悪である。他人の良さに付け込まれ、騙され、裏切られ、いいように利用されて滅びてしまう。
　こういった人は、小説の中だけでなく、実際存在する。読んでいて、さる友人を思い起こした、彼は、女性にはもてなかったが、それ以外は、童門冬二の「将門」にそっくりであった。
　彼を思い出すと、小説を最後まで読む事が如何にも辛かった。

JICA の動き

JICA 海外協力隊 2021 年春募集実施時期

事務局

　世界規模での新型コロナウイルス感染症の流行を踏まえ、JICA 海外協力隊 2021 年春募集については、2021 年 5 月 20 日(木)～6 月 30 日(水)に実施する模様です。

海外グラフィティ

ブランド人になれ！を読んで

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

一世を風靡した「エクセレント・カンパニー」の著者・トム・ピータースの１９９９年の著書である。邦訳の副題が「これからの会社員の教科書」とあるが、このフレーズは内容と異なりいまいちしっくりと来ない。テレビメディアで今を時めく池上彰の「なぜ僕らは働くのか」も合わせ読んだが、夥しい数の「定年本」とあまり変わらず、これも面白くなく説得力が無い。

１）高齢のアメリカ人の７０％がもっと若いときに積極的に生きればよかったという気持を持っているという。

２）夥しい数の定年本のステレオタイプは、６５歳まで何とか糊口をしのいであとは、貯金を取り崩し、趣味で生きる。そのために貯金は２０００万円くらい必要というものである。

大企業であれ、中小企業であれ、６５歳までは、なんとか会社というブランドあるいは、看板を背負って生きれるが、それ以上は自身のブランドがない限りは積年の貯蓄に頼らざるを得ないのが本音だろう。そういう意味で「自身のブランド」が無いと百年時代は生きられない。中身はともかくこの「ブランド人になれ！」というタイトルだけはいただきである。つまりは「会社人」ではだめなのだ。

「なぜ僕らは働くのか」では、ステレオタイプではあるが、人生の三大支出として①教育の費用②住宅購入③老後の費用を挙げている。そして、人生百年時代の計算で、次の数字を示している。

出費１億１、１３０万円―収入９、３６６万円＝１、７６４万円

これでは、いわゆる「定年本」と何ら変わらない。そして老後は「趣味で生きる」。

トム・ピータースは実に５０のアドバイスをしている。原題がＴＨＥ　ＢＲＡＮＤＯ　ＹＯＵ　５０である。５０のアドバイスのうち最も書名にふさわしいのは、次の二つである。

１．人はだれも、何かを売って生きている。

２．あなたは、営業ができるか。

ひとが取ってきた仕事をやるのが雇われ人、自力で取ってくるのがブランド人だ。

大企業が生まれる前、社会保障も失業保険も無かったころ、職を保証するものは、これも２つ、①抜きんでた技量②ネットワーキングの力だ。まさに、人生百年時代に必要なのは，悠々自適の老後でなくて、死ぬまで働くことであり、自身のブランド力を磨くことにある。

年金崩壊が話題になり、２０００万円あまりの老後資金が必要との数字が物議を醸しているが、いずれ定年も６５歳から７０歳最後は７５歳になるだろう。しかし、自身がブランド人になれば、考え方もがらっと変えなければならないだろう。自身のパラダイムシフトである。ブランド人になろう！（完）

三島由紀夫回想

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

三島由紀夫が没してからちょうど５０年が経過した。思えば、当時日本は社会全体がたぎった時代だった。ノーベル文学賞候補にもなった文豪だが、若干４５歳で自ら死を選んだ。最近、文学賞で「引きこもり文学大賞」なるものがあることを知った。常に社会というものと対決していた三島と比較すると、なんとも情けない世相ではある。

岩波新書刊でごく最近、佐藤秀明氏の「三島由紀夫・・・悲劇への欲動」を読んだが、評論の集大成ということで、実に内容が濃くうまくまとまっている。引きこもりというものが俗世間との関係を断ち切ってゆく行為で生きている実感が持てないであろうと想像できるのに対し、佐藤氏の述懐で「人は、生きてゆく上で何らかの負荷がかからなければ、生の実感が保てない…」という正にこの言葉通りの短い人生を三島は生きた。４５歳である意味で充分だったのだ。

面白いエピソードを拾うと、本書には無いが、三島のペンネームの由来が、東海道線で三島の駅を通過した際、雪をかぶった富士の頂があまりにも美しかったので命名したそうだ。そして、書中にもある通り、自身が生まれたとき「盥（たらい）にひたした産湯の表面がきらりと光ったという記憶がある」と。

大正１４年高級官僚の家に生まれた。その後学習院の初等科から中等科を経て高等科に進む。中等科の時代、「花盛りの森」を発表している。早熟である。戦前官立であった学習院を首席で卒業、無試験で東大法学部に入ったが、後に辛くも大蔵省に入省、その時の高文試験の成績が１６７人中１３８番であったそうだが、よくその成績で難関の大蔵省に入省出来たなと思う。１９歳で徴兵検査を受け、第二乙種合格、入営通知もきたが、身体検査で肺浸潤がみつかり、即日帰京する。軍隊経験は無いが、中島飛行機に学徒動員されている。大蔵省を２３歳で退職、作家生活に入る。世界旅行の際、占領下の日本ではパスポートが手にはいらず、マッカーサーの署名入りの旅行許可証で旅立った。欧米を旅する中で感動したのがギリシャだ。

そこでは、「私はついにアクロポリスを見た。パルテノン神殿を見た。ゼウスの宮居を見た」と書き記している。さらには、おんぼろバスで１０時間かけて「地球の臍」と言われるデルフィにも行っている。デルフィは日本で言えば、伊勢神宮にあたり、ギリシャ人の心の故郷ともいうべき場所だ。

最終的には１００名ほどに膨れ上がった「楯の会」という私設の民兵団を創設したが、団の運営費はすべて三島の私費で賄ったという。日本の青年に期待する気持ちが強く、自決する１年前、自分の母校東大にも護衛を付けず一人で乗り込み「東大全共闘１０００人ＶＳ三島由紀夫」という討論にも出席している。粗暴な学生の議論に丁寧に応答している。今どきこんな壮年の評論家がいるだろうか？最後は、あまりに有名な、市ヶ谷の自衛隊駐屯地での割腹自殺である。遺作ともいうべき「豊穣の海」を書き上げ、残されたのは自身の大義に基づく死を賭けた行動だけだった。三島の驚くべき美文と幅広い活動の裏付けは、佐藤氏いわく「前意味論的欲動」であり、①悲劇的であり、かつ②身を挺する行動力である。

そこには、個人の為でなく、日本という国の為の「大義に基づく行為」となっていた。三島が今生きていたらどんな言動をするだろうか？（完）

最果タヒの世界

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

若い世代に圧倒的に人気のある女流詩人で作家の**最果タヒ**。プロフィールは謎で、写真も顔を出さず後ろ向きが多々ある。「グッドモーニング」で**中原中也**賞を受賞。一読したが、正に情念の塊。普通、文学は情念と論理の融合で、作者の世界観を「言葉」で表現する。

「**足の裏**」という詩の冒頭のフレーズ。

真夜中、雨が降る中で、このむらでたったひとつの体育館に、わたしがみつけた
おおきな熊がたいこをたたき、それを見つけたわたしに
それ以上はいることを許そうとはしない

他の詩もだいたいこんな調子である。ここでは、作者の世界観はなかなか見えてこない。対比して違いをみるため、**金子みすゞ**を取り上げる。

私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、お空はちっとも飛べないが、飛べる小鳥は私のように、地面を早くは走れない　私がからだをゆすっても、きれいな音は出ないけど、あの鳴る鈴は私のやうに　たくさんな唄はしらないよ。鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。

金子みすゞの世界観が如実に表現されている。実は、芸術、音楽でも絵画でも小説でも詩でも、その作者の世界観や生き様が表現されていないとなかなか心に響かない。

むしろ、**最果タヒ**の場合は、小説の方が世界観がよく見えてくる。例えば「**十代に共感する奴はみんな嘘つき**」を読むと現代の女子高生の心情がうまく表現されている。このあたりが、若者に受ける理由なのだろう。但しである。次のような若者言葉を理解しないと全体が意味不明で終わる。

・サブカル
・じゃがりこ
・エモい
・ハブられる
・ビッチ
・ブラコン

そして、「自殺」というワードは後追い自殺も容易に想起させる。この小説を読むと今の女高生が何を考えているか誠によくわかるのである。（完）

海外便り

南イタリア俳柳紀行(2)

元 JICA シニアボランティア
北垣　勝之

イタリアに 一見(いちげん) なれど鳥の友

名にし負うコマドリ可愛い我と来て
海いずこ人慣れカモメ観光地

イタリアにも見慣れた鳥たちがいた。野山を飛翔する猛禽類、市街地を渉猟するスズメやハト等々、されどポンペイの遺跡で見かけた鳥も日本でよく見る鳥だ。胸は鮮やかな橙色、背面は暗褐色でスズメ大の小鳥、なんだっけ？思い出せないまま帰国後調べたらコマドリだった。これぞ歴とした‘European robin’、欧州ではごく一般的な鳥である。遺跡ガイドのように私たちを案内してくれる。また大勢の観光客でごった返すフォロロマーノの展望台では、カモメが近くにすり寄り愛嬌を振り撒く。恐らく何がしか食べ物のおねだりに来たのであろう。当初カモメかウミネコか見分けがつかなかったが、直近で眺めているうちに嘴の先の色や尻尾の模様などカモメと分かる。海浜からかなり離れていても餌を貰えるローマの遺跡は、彼等にとって快適な棲み処のようだ。

港町人種もゴミもダイバシティ
回収遅々分別ゴミも儘ならず

イタリア市街のゴミは何とかならないものだろうか。特に今回訪れたバーリやナポリの街は汚い。その主たる要因は分別ごみの処理にある。回収箱に収納できなかった大きなゴミ、ビンカンと段ボール、不燃物と可燃物がごっちゃになっている所が多い。それに回収は夜間の交通量の少ない時間帯に行うのか、日中はゴミが溢れている所が圧倒的に多い。そんな状態だから食べ物のカスや、飲料等の液体物、プラスチック容器やビニール袋などが混然となり周囲に放置される。折角のお洒落なタイル路も汚れがひどい。水圧掃除機で入念に清掃しないと染みが残る。このような様はごみ処理と廃棄物についての情報管理が不徹底だから生じる。住民・市民は勿論、移民・観光客に対しても悉皆周知することが必要である。そして違反者への罰則も含めてまずは行政当局の意識喚起を促したい。

ポンペイや栄華を偲ぶ遺跡かな
ポンペイに学ぶ災害畏怖の念

ポンペイ遺跡を訪れるのは 2014 年に次いで 2 回目、大方の見所は既知の場所だが、ただ広大な遺跡の最北西部の秘儀荘(Villa dei Misteri)だけは見残したところ。初訪問の家内を連れてポンペイ全域を見て回り復習する。そもそもポンペイは紀元前 8 世紀頃からヴェスヴィオ火山の溶岩の丘に築かれた町である、その頃小アジア方面からやって来た民族のエトルリア人が定着するが、紀元前 3 世紀頃ローマ軍に破れてその配下に置かれる。だが、その後市民権を回復、ワインやオリーブの栽培、円形闘技場やローマ劇場の落成など帝政期ローマの支配下で繁栄する。そして紀元 62 年に大地震が起こり、さらに

続いて同 79 年に起こったヴェスヴィオ火山大噴火によってポンペイは壊滅する。当時高度に発達した生活実態と文化的施設の大半が火山灰と溶岩のもとに埋没、その一部が遺跡群として陽の目を浴びる。2000 年も前の出来事とは言え今日人類が自然との共生において、常に頭のどこかに留めおくべき歴史的事件である。ポンペイはいつも「自然を侮るな」と発信している。

ヴェスヴィオ火山は雲隠れ　　ローマン・モザイクはポンペイ以前から遺品や遺体復元の管理・保存　　恒常的遺産保守工事のコロッセオ

旅冥利郷土料理に如くはなし

郷に入れば郷に従え、食べ物も同様である。地産地消の安くて旨いものを見つけ食すに限る。ナポリに来たら必ず行くピザ屋がある。とは言っても今回が 3 回目、創業 100 年以上の老舗「ダ・ミケーレ」である。此処のピッツァは 4 種類のみ、小生はいつも特大のマルガリータを注文する。目の前の炉に入れて出来上がるまで 10 分足らず、その間ビールを飲みながら待つ。櫂のような長尺の柄でピッツァを移動させながら焼き上げるわけだが、これを扱う給仕人と時折会話を交わす。まず「何処から来たの」、「日本人か」で当たり。それほどまでに日本人もよく来るようだ。勿論、中国人や韓国人の客も多いが、給仕人はいずれも年季の入った熟年者、国籍を見分けるのはお手の物である。今回は二日続けて出向きすっかり顔なじみなってしまった。地元の客層も学生など若い人が多いが年寄りも大型ピッツァにかぶりつく、それだけ庶民的で気さくな店、彼等は皆々デカピッツァの一人前が普通、以前私もそれに挑戦したが一寸腹に応える。今回は「家内とシェアーだよ」と宣誓、二皿に切り分けてくれた。飲み物も入れて全部で 11€であった。客の切れ目がなくいつも混んでいる大衆食堂である。

欧州路クソも放便 銭(ぜに) 次第

ヨーロッパの観光立国と言われる国々はどこのトイレ事情もせこい。無料の公衆便所はほとんどなく、駅・公園など公共施設にはあっても有料の所が多い。無料トイレだと汚く、機器の破損や備品の欠如、維持するにもお金が要る。管理は杜撰になり世話する人もいなくなる。こういう状況を改善するべく全ての公衆便所は有料化して、本来の機能を維持、清潔で心地よい癒しの場所にする施策が進行中である。ナポリ中央駅のトイレの利用料は 1€、広々としていて明るく快適だ。さて利便さと金額の釣り合いをどう見るか。美術館や博物館などの公共施設、かつ飲食店等の私設トイレは勿論無料だが、これ等と比較考証するにしても、そもそも人間の生理現象をカネで差別化する考え方はいかがなものか。

華人微々春節歓迎 空々(そらぞら) し

商魂の春節むなしコロナ菌

ローマ・フェミチーノ空港に降り立つや、場内には至る所に烈々歓迎の赤提灯がぶら下がっている。春節を間近に中国人観光客へのメッセージなのである。いくらお調子者のイタ公でもここまで媚びるか唖然とした。人口世界一、モノづくりと IoT の最先端基地である中国は、今やアメリカ相手に世界の覇権を争うに足る最強国にのし上がろうとしている。中国のヒト・モノ・カネ・コトを度外視しては経済が立ち行かない実勢を築き上げてきた。中国の触手は欧米・アジア・中東・アフリカへと全世界に広がる。一方ＥＵ内で孤立，退潮著しいイタリアが中国に靡くのも至極当然のこと、それが世界の現状かと思われた。だが今回の私の旅行中にも事件は着々逆方向に進みつつあった。家内のスマホには日本からのニュースが日々送られてくる。日本を旅立つ時に比べたらコロナウイルス新型肺炎の影響は手の付けられないほど深刻な事態に突入している。他国への伝染も時間の問題であろう。最早一時も早く日本に戻らねばならぬと案じた。最後に立寄ったローマには、それまで南イタリアではあまり見かけなかった中国人らしき人種が大勢物見遊山しているではないか。人種差別ではなくコロナ菌を避けたい一心で、なるべく彼等の傍に近寄らないようにする。

中国と聞いて距離置くスナップショット
空港にマスクいろいろ新ファッション

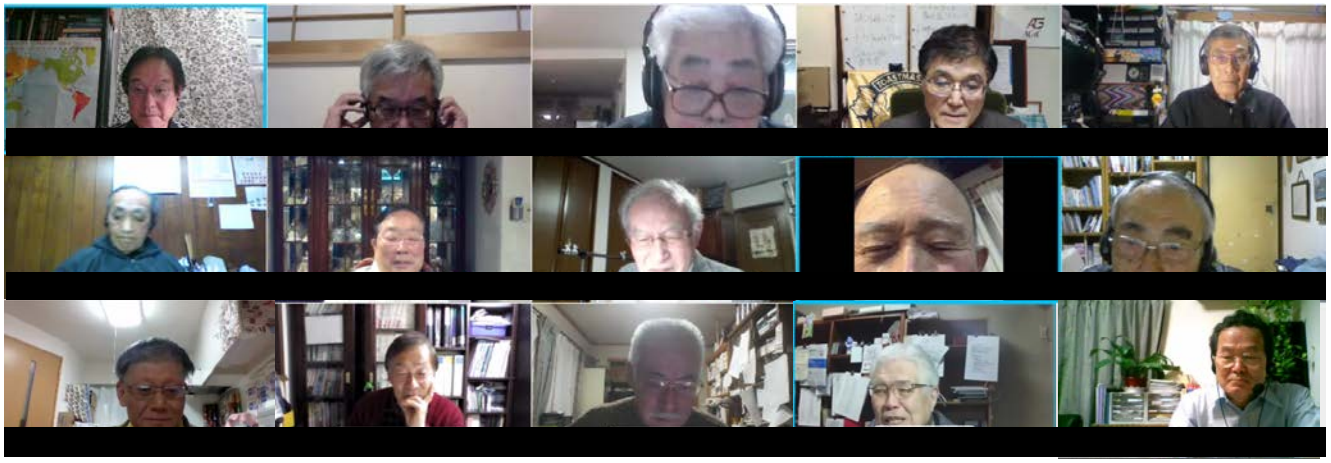
マテーラのサッシを散策していたら、小学生くらいの娘を連れたアジア系の家族から自分たちの写真を撮ってくれと言われ、気安くＯＫしてカメラを受け取る。ハイチーズで 2、3 枚シャッターを押し「どこから来られたのですか」と尋ねたら「上海から」、それを聞いて一瞬腰が退けた。お互いマスク無しでの接触、相手は浙江省にも近い場所柄だけに心穏やかではない。マスクと言えば、空港では見たことのないいろんなデザインのマスク人に出会った。白マスクの真ん中に赤い通気口が付いた日の丸みたいなマスクも、多国籍の人が行き交う場所だがヨーロッパ系の人である。他にもいろんな図柄や模様入りのマスクが往来する。今や一種のファッションになっているが、色も白のほか青、黒、ピンクなど好みはいろいろ、これでコロナ菌を防げたら言うことなし。(次号に続く)

ウェブサロンの話、あれこれ

第 5 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

事務局

第 5 回 ICT 海外情報ウェブサロンが 2020 年 12 月 12 日(土)19 時 30 分～21 時、ウェブ会議室において開催された。テーマは「2020 年を振り返って」であった。当会の久保幹事が京都から参加し、「清水寺における今年の漢字は何か」と問いかけ、また参加者から本年の想い出・考えたことなどが語られた。農業や学生海外派遣への感染症の影響、熊本洪水、健康のほか、逆にコロナ太りで仕事が多忙になった話など、バラエティ富むサロンとなった。2021 年は良い年になるよう、全員で万歳三唱し、一年を締めくくった。



お知らせ

第 6 回 ICT 海外情報ウェブサロン開催のご案内

事務局

ICT 海外ボランティア会(ICTOV)による第 6 回 ICT 海外情報ウェブサロンを下記のとおり開催いたしますので、ご多忙とは存じますが、奮ってご参加くださいますようよろしくお願い申し上げます。

1. 日時：2021 年 2 月 20 日(土) 13 時 30 分～15 時 30 分(日本時間)
   (注)今回は開催時間を昼間帯に設定しましたのでご注意ください。
2. 場所：ウェブ会議室(Webex を使用)
3. テーマ：「旅の想い出(その 2)」
4. 参加費：無料(会員制ではなく、どなたでも参加できます)
5. 定員：100 名(先着順)
6. 申込方法：参加ご希望の方は、下記連絡先にご氏名及びウェブサロン参加希望の旨をご連絡ください。折り返し、ウェブ会議室への入室方法等についてご返信いたします。
   ＜連絡先＞　ICTOV 事務局　info.ictov@network.email.ne.jp

☆昨年 10 月 31 日に開催した「旅の想い出」の好評に応え、当会の松田幹事による北半球一周の旅の想い出を始め、皆様の旅の想い出や失敗談などについて自由にご紹介いただき、ご自宅等にいながら気軽に楽しく、緊急事態宣言下にも少し旅行気分を味わい合うものです。次の旅行計画の参考になることがあるかもしれません。

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 96 号を発行することができました。今回は当会の鈴木顧問(株式会社ハイホーCEO)から「フィリピンの医療と手術のこと」のご寄稿をいただくとともに、徒然日記、海外グラフィティ、南イタリア俳柳紀行のご寄稿も継続していただき、誠にありがとうございます。

ウェブ会議室を活用し、全国・全世界から参加できる「ICT 海外情報ウェブサロン」は 5 回目を開催し、運営も少しずつ慣れてきたように思います。ご参加の皆様のご協力に感謝するとともに、第 6 回開催もご案内しておりますので、多数の皆様がご参加くださいますようお願い申し上げます。

当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記サイトにご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなるご寄稿をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

https://ictov.jimdo.com/コメント/

発行：　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当：　空席のため募集中（編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当：　山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)